

紹介

岩田修二著

『統合自然地理学』

自然災害が頻発し、地球環境問題が切迫した社会問題となった近年、地域の自然・環境を総合的・俯瞰的にとらえる自然地理学的重要性が再評価されている。相互に関連している地表付近の自然を、細分せずに総体として研究することの意味、そこに自然地理学が存在理由があると、著者は本書のはじめに述べている。しかし一方で、現在においても、自然地理学という科学がうまく説明された教科書、参考書等ほとんど無く、異なる自然の研究領域を寄せ集めた学問とされている実態に著者は危惧する。

本書では、研究領域別ではない自然地理学を統合自然地理学（領域横断型・領域俯瞰型自然地理学）とし、その本質や論理、総合的に自然を理解する方法が解説され、その具体的な研究事例が紹介される。

まず第1部では、自然の全体像を説明しようとした自然地理学の始まりを確認し、

現在では領域別に細分された自然を教える、あるいは分析する学問に変わってしまった経緯を歴史から読み解く。一九世紀後半からの、自然科学の要素還元主義、因果律決定論の影響を受けて、細分化した領域に分かれたと著者は指摘する。また、元来の自然地理学の特徴として、博物学の遺産、人間との関わり、俯瞰的見方の三点を挙げるが、それぞれに批判があり、その対応から自然地理学は変貌したと著者は考察する。しかし最後には、その変貌を是正するための、領域俯瞰型の統合自然地理学への回帰を提唱する。

次に第2部では、前半に統合自然地理学の論理や法則性を論じる。風景こそが地域の外観（形態）であると認識し、多様な風景構成要素を整理するための、空間スケールと時間スケールの関係の重要性を指摘する。後半では、統合自然地理学研究の手法、方法について、地図の重ね合わせの位置付けや、生態学的に地域の自然を総合的に扱う生態学の視点、地球システム科学の有効性を検討する。

そして第3部では、丘陵地、高山帯、山地の溪流、ヒマラヤの水河湖、アムール川

とオホーツク海という、様々な地域における領域俯瞰型の研究事例を示し、統合自然地理学の将来の発展と、その方向性を考察する。統合自然地理学の研究者に必要とされるのは、俯瞰的な見方による仮説の提示と、その仮説を分析的手法によって検証する諸領域を組織して、俯瞰的研究にとりまとめる能力だと著者は結論づける。最終章では、成功する統合自然地理学への道と題し、領域俯瞰型の研究を推進するための学習方法や、教育方法などを提示し、本書を締めくくる。

統合自然地理学という学問によって、「地球表面の自然環境と人間生活の総体」を説明するために、本書では様々な文献、資料が紹介され、中には絵本を用いて解説される章もある。大変わかりやすく易しい文章でありながら、壮大かつ複雑な自然を対象とする統合自然地理学の魅力や醍醐味、学問分野としてあり続けるための課題が具体的に著としてある。また参考資料ページでは、様々な分野や考え方との関連を知ることができ、まさに領域横断・領域俯瞰的にまとめられた、統合自然地理学の解説書だと紹介者は感じる。地理学の学習者に限

らず、地球環境を考える全ての人々に、ぜひ一読していただきたい。

(A5判 二八〇頁 二〇一八年五月)

東京大学出版会 税別三八〇〇円)

(芝田篤紀 京都大学大学院

文学研究科博士課程)